



TITLE:

星の名稱と傳説(二)

AUTHOR(S):

新村, 出

CITATION:

新村, 出. 星の名稱と傳説(二). 天界 1923, 3(28): 101-103

ISSUE DATE:

1923-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159857>

RIGHT:

星の名稱と傳説(二)

文學博士 新村 出

二十八宿の和名

前號に述べた如く星の和名は元來極少ない。日本人が星界を觀察して名づけた星云つたら、先づ遊星では金星のユフヅツミアカボシ、之は皆の明星と曉の明星で人の知る如くである。火星となるミ、前號所説の如くもう直譯語であつて、自然に出來た命名ではない。元祿元年に貝原好古の編した和爾雅によるミ、木星をその一名辰星といふにより、トシノホシミ直譯し、水星をその一名辰星といふにより、タチミボシミ字譯した。太白をフトロボシミ云ふが如きは、火星を別にアカリボシ又ホノホボシミいふミ共に漢字の直譯に過ぎない天の川の兩岸のヒコボシミタナバタの如きも、由來唐土から借りた傳説に基くもので、その命名は意譯ではあるが、やはり翻譯にミミまり日本人固有の星界觀察から出てはゐない。今こゝに述べようとする二十八星の命名の如きも、その二三を除くミ、全く直譯か然らずんば天文家が陰陽家が中世乃至近世に命名した符牒の様なものに外ならぬのである。但し其名稱の本義即ち語源がわかつて來るミ、從つて専門家が命名

の由來も判明するから面白いのであるが、今のミこころ大半その眞義が理解されないから困る。即ち二十八宿の名稱中には實際民間に行はれた俗語から採用したものも少しはあるが、過半は新造語新譯語であるらしい。新造語にしても、その星の特質なきにかなふ名前なら興味があるのだが、今のミこころ語源が大部分不明である、文字の上から、字義に拘泥して、宛がつた名が多いのである。

さて二十八宿の星の名の多數は、古い辭書には出てゐない無論記録にも文學にもあらはれてゐない。スバルだけは取除けであつて、中古から辭書や文學に散見し、尙予の見解では上古から否太古からも一般に知られ、その名も固有であつたと思はれる。然しその外では近世に心ミ參ミこの二宿のみが俗間に知られ、自然的命名を得ただけで、他の二十五宿の名は學者の新造新譯にミミまるミしか見えない。

スバルは近世の方言にも稀にスマルミ呼ばれたが、上古又は太古にはスマルミいふのが、元の呼び方であつたらしい。それが中古になつて音韻變化の通例に従つてスバルミなつたのだ。六連星ミいふのが近世の江戸語であつた。東國では九曜の星ミいつたミ、是も安永四年の物類稱呼ミいふ諸國方言集に出てゐる。九曜ミいつたのは、注意を要するが、果して七星即ちアトラスの七人娘の外に、その父母の二星までを込

めて日本人が九箇を認め得たであらうか。幕末の外國語辭書には、七星だの七曜だのいふ直譯名が見えてゐる。こにくスマル又スバルといふ名は、統括の意義であつて、六ツなり七ツなり若干の衆星をスベルといふ意義で、國語固有の呼びかたであるだけ最も有りがたい。古代に玉ノミスマルなごミ云つて連珠のことをさう云つたが、古代人はスバル星を眞珠なす眞白玉とも連想したであらう、白銀なす連珠にも比べたであらう。

オリオン星座の三星を今でも普通三ツ星といふが、物類稱呼には、その外、三光、三かほし、三ちやうの星といふ名もあり、別に親になひ星といふ稱呼も見える。このいはゆるオリオンの帶にあたる三王星は、古く支那でも參(シン)と呼ばれた如く、認識し易い星であるが、上にベテルギウスの如き輝星を擔ふので、近世これを親になひ星と呼んだのは、上出來の命名ではないけれど、日本人としては恕しておく。然るに、元祿の和爾雅や書言字考の如き辭書にはカラスキボシに云ふ名が當てゐる。この方が由來が古くもありさうで、又農民的命名でむしろ自然に見える。文化元年の漢汐草といふアイヌ語の辭書を見るに、參宿をイウタニと呼んでゐる。アイヌ語で杵をイウタニ云ふから、三ツ星はアイヌでは杵星の意だ。日本語のカラスキ星異曲同工な名附け方である。

共に農民的な名前で面白い。

三ツ星は、必ずしもオリオン座に限らず、予輩素人は往々星空のあちこちに同様に並んだ三ツ星を見出すことがある。ヒコボシの所にも河鼓三星があり、心宿にも亦三星があることは、支那の天文學でも知られてゐる通りだ。そこで蝎座即ち心宿の一名をオヤニナヒ星といふことが、元祿の書言字考や享保の名物六帖の様な字引に出てゐる。明和の雜字類編にもある。こゝで云ふ親星はここの三星以外のものをさすのか、それともアンタレス即ち大火を親に見立てるのか、其邊のこゝは知らない。天明の俳句に「星合やわれは嬉しき親になひ」といふ七夕をよんだ曉臺の句があるのは、これは河鼓三星に因んだものではあるまいかと思ふ。ウスミか、キヌミか、カラスキミか、マスミか云ふ農耕關係の用語や親ミか子ミかいふ親族關係の稱呼は、往古のうぶな形似的命名法であるから多少名義の錯誤も生ずるわけだ。それから蝎座の主星たる大火のこゝを支那で又心といひ、日本で近世それをナカゴボシミ譯してゐる。心は中心の意でそれを中子といひ、佛像だの刀劍だのについてナカゴミ名づけてゐるのと同じ筆法であつて星の名に呼ぶのも、やはり直譯にこゝまるのである。

以上三宿の外の二十八宿の名稱は、前述べた通り宛てがつた直譯的符牒ばかりだ。今和爾雅によつて抄出するに次の如

くである。

角、スボシ	亢、アミボシ	氐、トモボシ
房、ソヒボシ	心、ナカゴボシ	尾、アシタボシ
箕、ミボシ	斗、ヒキツボシ	牛、イナミボシ
女、ウルキボシ	虛、トミテボシ	危、ウミヤメボシ
室、ハワ井ボシ	壁、ナマメボシ	奎、トリキボシ
婁、タタラボシ	胃、エキヘボシ	昂、スバルボシ
畢、アケリボシ	觜、トロキボシ	參、ウルホボシ
井、チチリボシ	鬼、タマノヲボシ	柳、ヌリコボシ
星、ホトラリボシ	張、チリコボシ	翼、タスキボシ
軫、ミツカケボシ		

右のうち箕のミボシ鬼のタマノヲボシの如きはわかる。角をヌボシといふのもスミボシの意かと思ふ。その他は前記の三種を除く語義が通じにくい。享保十六年跋の星座圖稿といふ寫本、ほど同じ時代の著かと思はれる宿曜經諸傳授纂要和解といふ寫本にも、右の大體同じ和名が見える。この宿曜經和解は、京大圖書館本は延享三年の寫本であるが、系統はもつと古からうと思ふ。スバルをホウキボシともしてゐるのは満洲語なごにもある命名で、彗星の遠くにかすかに見えるのは、素人の肉眼ではスバルミ見まがふのも無理はない。參をウルホ星といふのは何故か。畢なら雨降り星として希臘以來

有名であるから、濕星といつても、尤だ。鬼をクセラボシ又ヲニボシと和解に出てゐる。クセラミは何か、タマラの誤寫かも知れぬ。こゝには翼のタスキをタヌキミしたり、亢のアミをヤミミ書いたり、尾をアシタレミしたり、斗をヒツキミしたり、胃をユキミしたり、和爾雅ミは少し出入があるが、ごこまでが誤寫か、ごこまでが正しいかは判然せぬ。但し和解の方に、牛を一名ヒコボシ又ヲタナバタミし、女をメタナバタミしたのは、共に誤解であることは言ふ迄もない。

これらの名稱の由來は近世の初期より以前に上るかどうか未だ明かでない。宿曜經の古寫本にでもあるかと思像するがそれも未だ手をつけない。但し中世の辭書には見えない。尙近世初期のものにも無く、やつと元祿から見始めるから、多分近世初期以來の稱呼かご假に推定したのである。(つゞく)

なんぢ昂宿の鏈索を結びうるや、

また參宿の繫繩を解きうるや？

なんぢ十二宮をその時に從ひて引きいだし得るや？

また北斗ミその子星を導びき得るや？

なんぢ天の常繩を知るや？

なんぢ天をしてその權力を地に施さしめ得るや？

舊約聖書約百記三十八章三一—三三節